

自分が見える

園長 高地 敬

ミヒヤエル・エンデ続きですが、『ネバーエンディング・ストーリー』は映画を見ただけです。設定が少し複雑なのですが、初めから説明すると長くなってしまうので、詳しくは原作を読むか映画をご覧ください。

ファンタジエンという夢の世界の中で、幼心の君(おきなごころのきみ)の病気を治す方法を見つけるために旅に出た少年アトレユは、さまざまな苦難の後、勇気が試される第1の関門をなんとか通過します。いよいよ第2の関門。そこには鏡があるだけなのですが、鏡を見ると自分が映る。しかも、自分の本当の姿が映る。勇気があると思っている者が本当は臆病だったり、優しいと思っている者が本当は冷たかったり、自分の本当の姿が見えるので、ほとんどの者は逃げ出してしまう、そんな鏡が第2の関門でした。

アトレユはそこも通過するのですが、とても考えさせられるシーンです。私が自分の本当の姿を見たら、やっぱり怖いだろうと思います。アトレユは通過できたけれど、私は第2はおろか、第1の関門も難しいでしょう。私たちは、ファンタジエンでなくても自分の至らなさを思い知ることが時々あります。そんな時、それを何とか受け入れるか、かなりのショックを受けて人に聞いてもらうか、やつ当たりするか。それか、至らないところがいっぱいある自分でも受け入れてくれる大事な人がいるか。

お母さんは完璧じゃないけれども、そんなお母さんを子どもは受け入れてくれているし、お母さんが子どもに期待することはたくさんあるけれども、それ以前にお母さんは我が子が大事です。このすてきな関係を、ここぞという時に思い出せればと思います。